

東下り 仮名書き・口語訳

あつまくたり

むかしをとこありけりそのをとこみをえうなきものにおもひなし
てきやうにはあらしあつまのかたにすむへきくにもとめにとてゆ
きけりもとよりとまとするひとひとりふたりしてゆきけりみちし
れるひともなくてまとひゆきけりみかはのくにやつはしといふと
ころにいたりぬそこをやつはしといひけるはみつゆくかはのくも
てなれははしをやつわたせるによりてなむやつはしといひけるそ
のさはのほとりのきのかけにおりゐてかれいひくひけりそのさは
にかきつはたいとおもしろくさきたりそれをみてあるひとのいは
くかきつはたといふいつもしをくのかみにすゑてたひのこころを
よめといひければよめるからころもきつつなれにしつましあれは
はるはるきぬるたひをしそおもふとよめりければみなひとかれい
ひのうえになみたおとしてほとひにけり

【口語訳】

- (一)昔、男がいたそうだ。
(二)その男は、自分を無用のものだと思いこんで、
「京にはおるまい。」
(三)東国の方に住みよい国を探しに行こう。」と思
つて旅に行ったそうだ。
(四)以前から友とする人を、一人二人連れて行っ
たそうだ。
(五)道を知っている人もなくて、迷いながら行っ
たそうだ。
(六)三河の国八橋というところに着いた。
(七)そこを八橋と言ったのは、水の流れる川が、

蜘蛛の足のようになっているので、橋を八本渡
したことよって、八橋と言ったそうだ。
(八)その沢のほとりの木の陰に下りて座って、乾
飯を食べたそうだ。
(九)その沢にかきつばたがとてもきれいに咲いて
いた。
(一〇)それを見て、ある人が言うことには、「『かき
つばた』という五文字を各句の初めに据えて旅
の心を詠んでくれ。」と言ったので、このよう
に詠んだ。

(二)唐衣を着続けてよれよれになった褌があるので、張りながら着てきたなあ。これまでの旅をこ
んなふうにした。

〔裏の口語訳〕

(一)と詠み終えたので、みんなは、乾飯の上に涙を落として乾飯がふやけてしまった。